

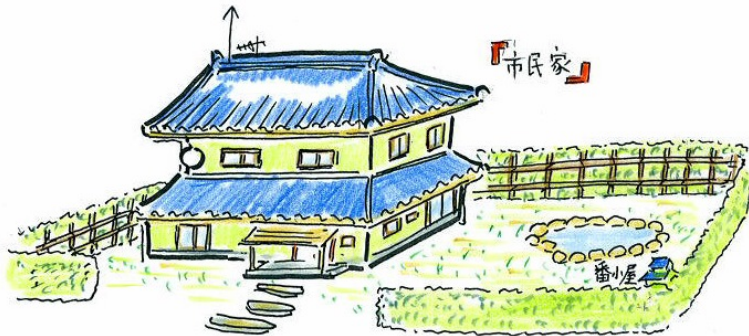
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

# これまでのあらすじ

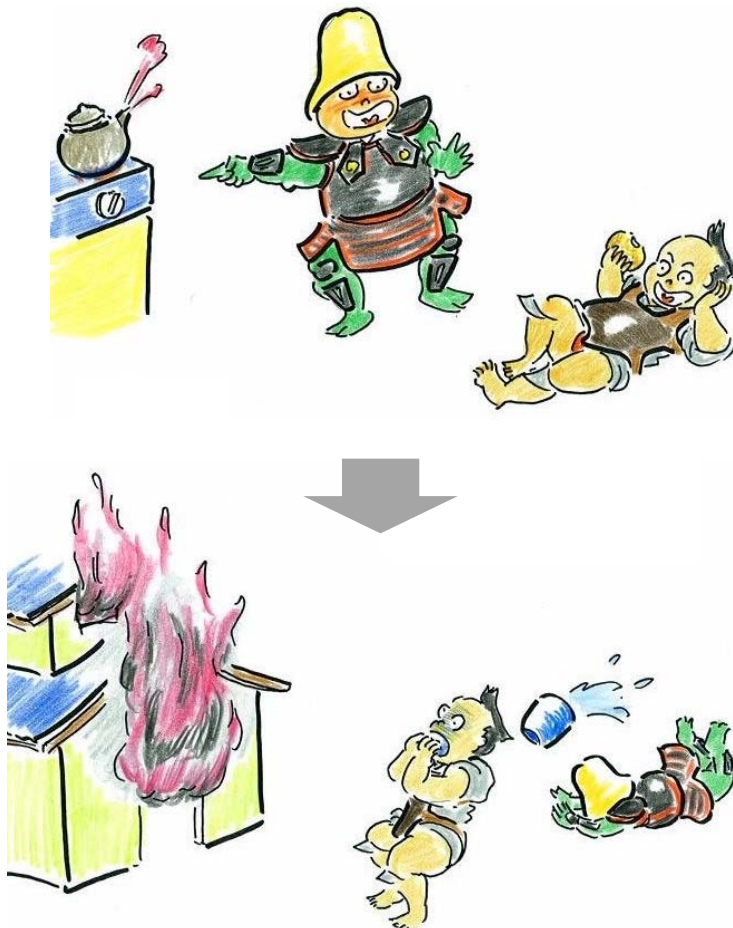
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の<sup>ちゅうげん</sup>中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん<sup>えん</sup>には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく  
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

**火災予防奮闘記** をどうぞご覧ください。

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.37

これからお話するのは、番小屋の片隅に置かれた嘆きの大釜のお話しじゃ。

お屋敷の点検を終え、主家の玄関に設けられたミー殿の出入り口から外に出た拙者のご助を師走の冷たい風が容赦なく襲い、堪えかねたご助が



「ううう、旦那様、こんな寒い日は早く帰って甘酒でキュウっと一杯いきたいですな。」と話しかけてきたのじゃった。

もとより下戸の拙者はご助の言葉に応える積もりはござらんかったのじゃが、  
つい

「そうよのお、（飲める者は）解禁の香箱蟹をあて（肴）にして飲めば美味  
かろうのお。」と独り言を喋ってしまったのじゃ。そおしたら・・・

「わっかりやしたあ」とご助が駆け出しましてな、拙者はその後ろ姿に  
「お、おい、ご助どこへ行くのじゃ？どうしたのじゃ？」と声を掛けたのじゃが  
「存じおり（知り合い）の寿司屋んちのご助のところへ！待ってて下せえ、  
なあに、一っ走りです。先に番小屋へ帰ってて下せえ。」と振り返りもせずに  
櫻畠（旧町名：現、寺町）の方へと消えて行ったのじゃった。



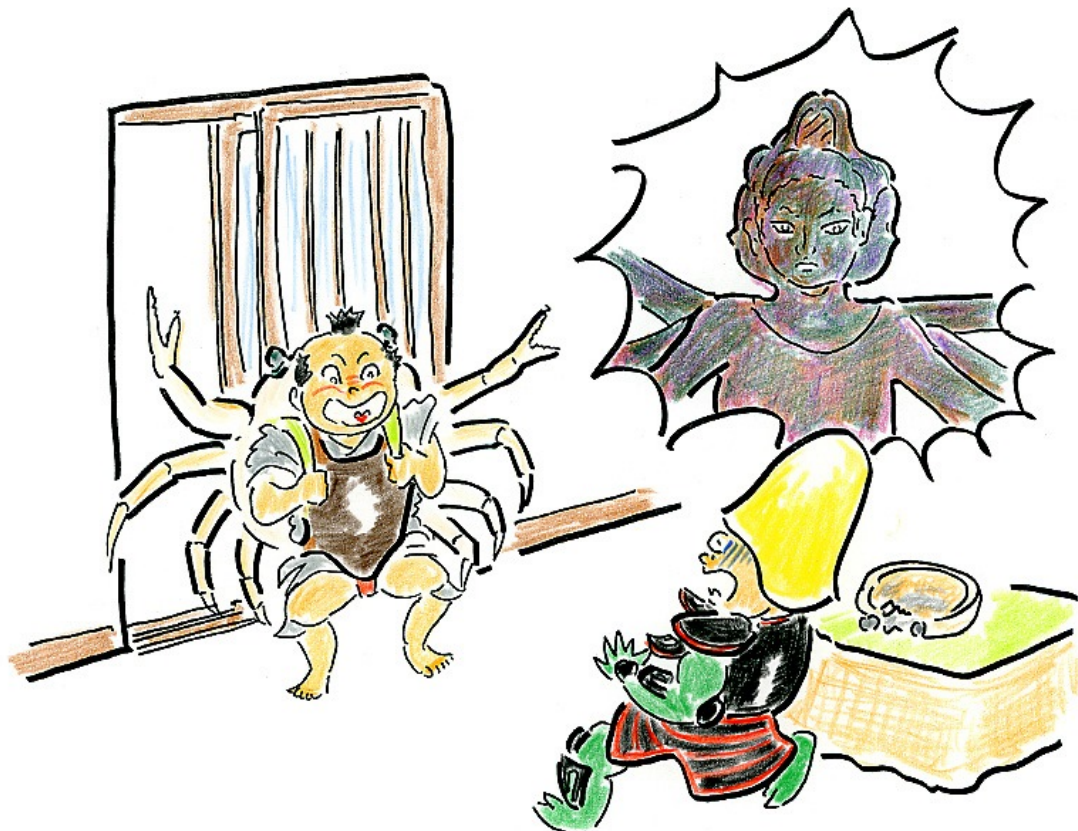
それから半刻（1時間）後、先に番小屋に帰りついた拙者は、作り置きの『金沢おでん』を温めながら

「何をやっておるのか、早く夕飯にせぬと明日のお勤めに支障を来すじゃろうが。」と待つのを止め、蟹面に箸を入れたところへ

「お、お待たせしやした。」と香箱を背負ったご助が息を切らして帰って参りまして

「遅い・・・な、なんじゃ？香箱をかうて来たのか？初物をか？た、高かったじゃろうが？な、なに、拙者の付けにして来たじゃと？」と叫んだ拙者は、ご助の背後で不気味に動く長い手足に

「あ、阿修羅様か？いや、まだ生きておるではないか？」と言葉を失ったのじゃった。



「へへへ、生きのいい奴をって言いやしたらこれを呉れたんでさ。高かった  
んですぜ。」というご助に

「どの口が言うておる？おのれが支払う訳ではあるまいがっ！」と叱りつけ  
たのじゃが、今更返すわけにもいかず

「兎に角おいしく頂くしかないかの。」と諦め、ご助に大釜の準備をさせた  
のじゃが、ご助の背から降ろされた香箱の生きのいいことと言ったら、左右4  
本づつの足で仁王立ちになると、鋭い鋏を拙者に振り下ろして参りましたのじ  
や。



「ひいいいっ」と、すんでのところでは最初の一撃をかわしたものの、その拍子に仰向けに倒れた拙者には、次の攻撃をかわす余裕はなく

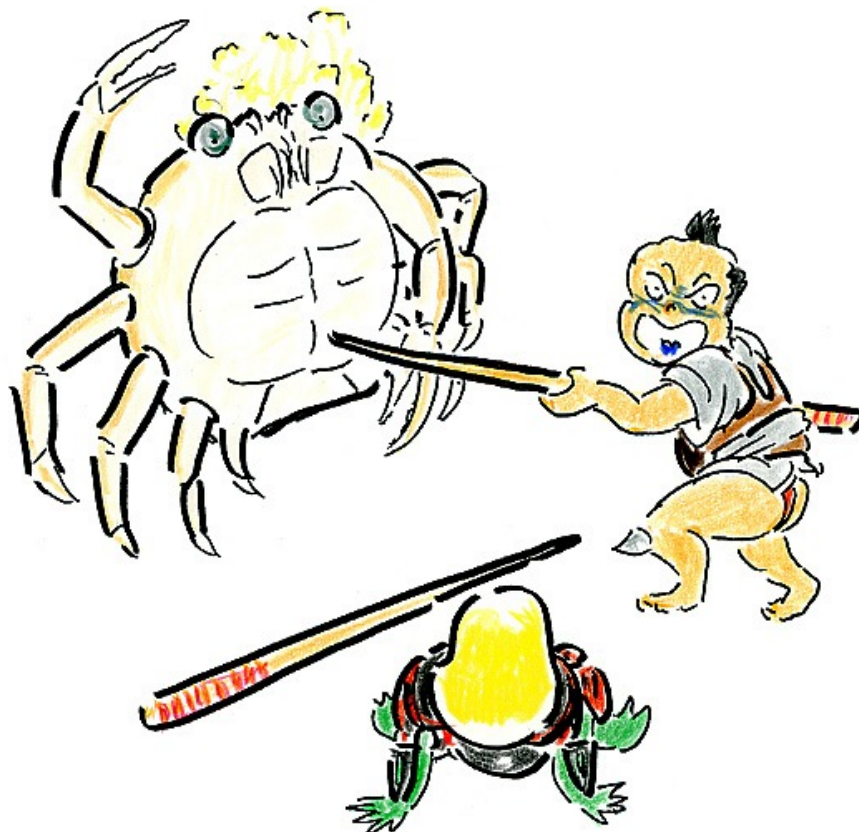
「南無さん、これまでじゃ」と覚悟を決め、両目を閉じたのじゃった。

『ガシンっ』 という大きな音と同時に鋭い衝撃が・・・鋭い衝撃が・・・走りませなんだ・・・。

「???・・・ど、どうしたことか？」と薄目を開けますれば、

「ああ？ご、ご助！」

な、何と、ご助が菜箸を手に香箱蟹と戦っておりましたのじゃ。



「だ、旦那様、何してらっしゃるんで！早く助太刀して下せえよ！」と奮闘  
するご助に

「ご、ご助。主人を救おうとするお主の働きこそ天晴じゃ！お主こそ中間の  
鏡よ！」と叫ぶと床に落ちていた菜箸を拾いあげ、ご助とともに香箱蟹に対峙  
したのじゃった。

「だ、旦那様！あ奴の鉞に気を取られちゃいけやせんぜ。他の脚の足払いに  
注意して下せえ。」とご助が叫ぶとおり、香箱は左右 8 本の脚を器用に繰り出  
し、巧みに拙者達の胴や脚を払いに来るのじゃった。

しかし、さしもの香箱蟹も陸の上での戦いに疲労の色は隠せず、1 刻（2 時  
間）の死闘ののち、拙者とご助の菜箸に絡み取られたのじゃった。





ようやく捕らえた香箱蟹をガスレンジにかけた大釜へ放り込むと、火を点けてから

「や、やったなご助。よう戦った。それに拙者の危機をよう救ってくれた。礼を言うぞ」とご助を褒め、頭を下げると

「え？や、止めて下せえよ。頭なんて下げねえで下せえ。」と後ずさるご助に

「いいや、今回の働きは抜群じゃった。褒美を遣わせねばな。」と、巾着から2千円札を取り出したのじゃが

「い、いいや。褒美ならもう頂いてまさ。」とご助は言う、番小屋の玄関の陰から何かを転がして来たのじゃった。

「な、何じゃ？以前にも同じ光景を見たような気がするが・・・も、もしや？」

「へへへ、福光屋さんで旦那様の付けにして買ってきたんでさ。」と笑うご助の足元には、加賀鳶の純米大吟醸『極寒吉祥』が・・・

「お、おまえ、そりゃあ『極寒吉祥』じゃないか！下戸の儂でも知っておるぞ。確か5千円はするぞ！」と叫ぶと



「いえいえ、6千円でさ。」と

「な、何が6千円でさ じゃ！しれっと言うなしれっ！こ、香箱と合わせていくら付けて来たんじゃ！」と怒鳴ると

「い、一本（1万円）でさ。」と右の人差し指をピンと立てるご助の誇らしげな姿に

「わ、儂の小遣いを超えておるではないか・・・」と一瞬気を失いかけたのじゃが

「いやあ、香箱蟹の攻撃には焦りやしたぜ。旦那様にもしものことがあれば、1万円全額、あっしが払わなくなるんでしょ？必死でしたぜ。あはははあ、あー良かった。」というご助の高笑いに正気に戻った拙者は

「お、おのれと言う奴は！」と叫ぶとご助めに飛び掛かったのじゃった。

「あっ、だ、旦那様、何をそんなに怒ってるんでさ！いたた、やめて・・・このお！」

「お、おのれは手向かいいたすか！ゆ、許さん。」

と、とうとう番小屋の中で大げんかが始まってしまったのですじゃ。



半刻後、決着のつかない取っ組み合いの中、

「ご、ご助、ご助、タンマ、タンマ、ニンチじゃ。何か臭わんか？」という

拙者の声に

「なんでえ何の臭いだって？・・・うん？確かに鉄の焦げる嫌な臭いがいた  
しますな。」と答えるご助とともにガスレンジの方を見ますと、蟹の大釜が  
『キンキンキン』と不気味な音を出しており申した。

「い、いかん。空焚きじゃ。水が無くなっておるぞ。」と拙者がレンジの火  
を止めると

「か、蟹は？4千円の甲箱は？」と脚立を持ったご助が走りこんできたのじやった。

「か、蟹があ」と二人して脚立を駆け上がり、中を覗き込んだ拙者らの目に・・・

しかし、大釜の中には何も入っておらず、大釜の底から、かすかな陽炎とともに『チンチンチン』と焼かれた鉄が収縮する音がするだけじゃった。

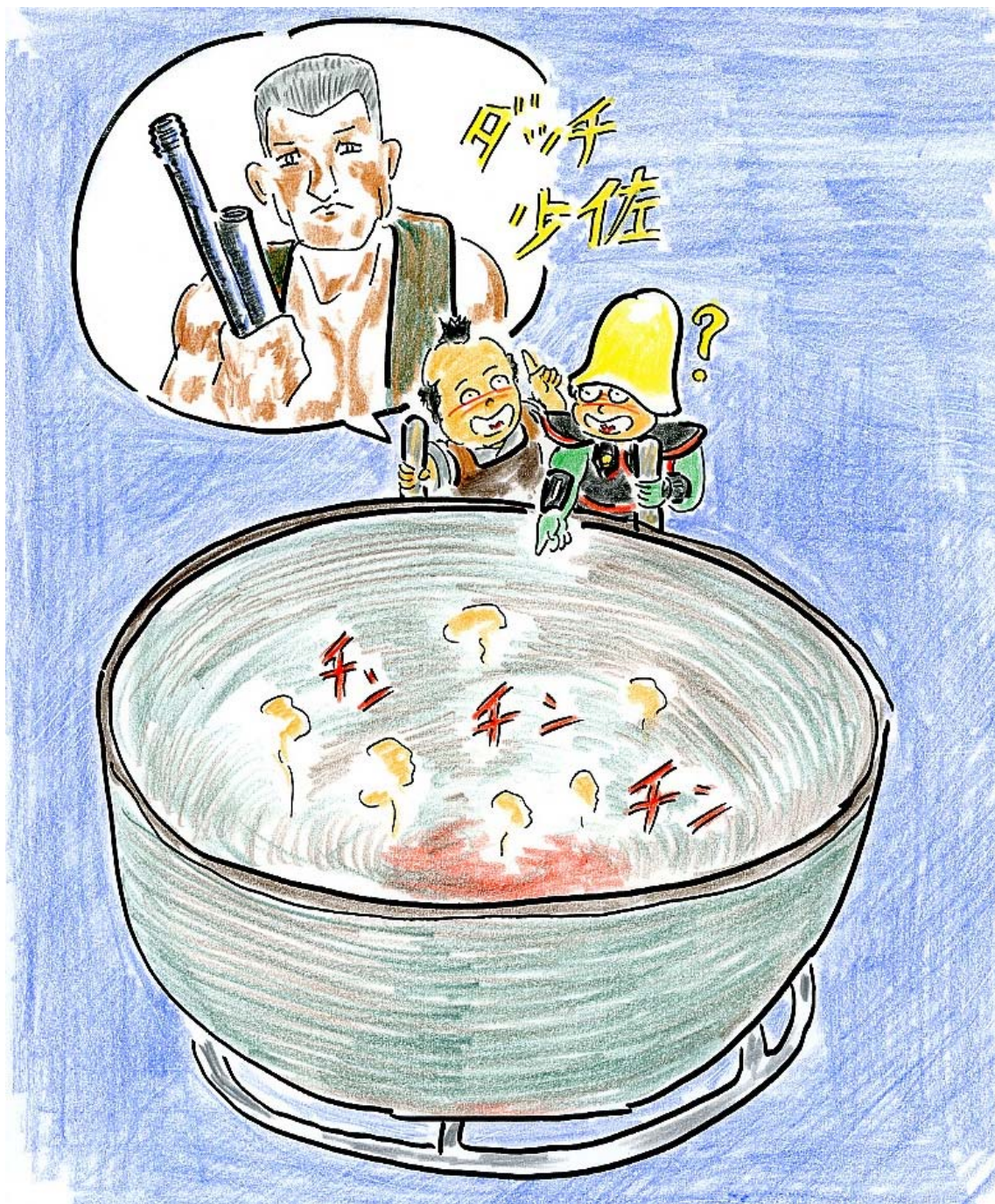
「おらん？おらんぞ香箱が？溶けたのか？」と拙者

「そんな馬鹿な、蟹が溶けるなんて聞いたことないですぜ。もっともダッチ少佐なら真相を知っているかもしれやせんぜ！」とご助

「・・・誰？誰じゃダッチ少佐って？」と聞く拙者に

「アラン・ダッチ・シェイファー少佐ですよ。『プレデター』見たことないんでやすか？」とご助。

「『プレデター』の?・・・シュワちゃんのか?アーノルドのシュワちゃん  
のか?おお、あのダッチ少佐かぁ。確かにプレデターは蟹の化け物みたいな奴  
じゃったな。」と納得顔で話す拙者に



「でしょ。戦っているときに旦那様も思いませんでしたか？」とご助はニヤニヤしながら話すのじゃった。

「プッ、そ、そう言われれば、ひひひ、確かに似ておったのお」とつられて拙者も笑ったのじゃった。

脚立の上で笑っていて油断していた拙者は、不覚にも背後に忍び寄る気配に気づかなかった。

ようやく、『カサカサカサ』と背後の微かな音に気付いた拙者らが同時に振り向くと、そこには・・・

「プ、プ、プレデター?!」

両腕の鉄を高々と差し上げたプレデターが、いや、香箱の奴が拙者らを見下ろしておったのじゃった。



儂らが喧嘩している間に大釜から逃げ出していたのじゃろう・・・。

食塩水で元気を取り戻した香箱が泡を吹きながら

「フォフォフォフォ・・・」と迫って来た。

拙者らに残された道はただ一つ。

「ご助！」

「旦那様！」

拙者らはお互いを呼び合々と、大釜の中へと飛び込んだのじゃ・・・。

先ほど火は消したと言うものの、大釜の底は焼ける熱さ。



「アチチ、アチチ！や、やい香箱め、悔しかった此処まで来やがれ！アチ、アチチ！」となじるご助を大釜の縁から見下ろしながら香箱は言った。

「フォフォフォフォ、フォフォフォ」と

「アチチ、な、何て言ってやすんで？アチチ」と聞いてくるご助に

「・・・香箱はの、拙者らに『鍋の空焚きには注意せいや』と言うたんじや。」と拙者は答えたのじゃった。

全身の痛むような熱さを忘れようと『心頭滅却すれば火もまた涼し』と悟りを開いた禅宗の僧を真似てうそぶいた拙者を、件の甲箱は「フォフォフォフォ『そこは違うじゃろ!』」と笑うと台所から出て行き、後に残った大釜からは「ウギャアアアアー！ アチチッ 助けてえー！」と拙者らの悲痛な叫びがいつまでも続いたのじゃった。

ようこそ最後までお付き合いいただきかたじけのうござりまする。

これが悲しき「嘆きの大釜」の全編ですじゃ。



(おしまい)